

国立大学法人等施設の機能水準に関する調査研究

研究代表者 新保 幸一（文教施設研究センター長）

1. 調査研究の概要

文教施設研究センターでは、文部科学省が設置する「今後の国立大学法人等施設の整備充実に関する調査研究協力者会議」（主査：木村孟東京工業大学名誉教授）の中間まとめ（平成21年8月）を受けて、国立大学法人（以下、「国立大学」という。）等施設の水準を評価する客観的・合理的な指標を開発するための調査研究を行い、このほど報告書を公表した。

2. 基本的な考え方

本調査研究では、国立大学等施設が備えるべき機能とその水準に照らして、対象建物がどの程度の水準にあるかを評価する新たな手法を開発した。

評価結果は、施設整備業務における改修の必要性や優先度を判断する根拠の一つとして活用することを想定している。評価は棟単位で行い、大規模改修を実施した際に改修前後の比較がよく分かるようにした。

3. 評価項目の設定

本システムでは、五つの大項目を設定し、これらを総合化して全体を評価する。

- ① 低炭素化に関する指標
- ② 耐震に関する指標
- ③ 老朽に関する指標
- ④ 居住環境に関する指標
- ⑤ 教育研究基盤に関する指標

大項目は全部で15の中項目で構成されている。各項目の内容は、既存の評価手法である建築環境総合性能評価システム（CASBEE）などを参考にして構成し、項目数を極力圧縮するなど簡便に実施できるよう配慮した。

4. 評価の実施方法

対象建物の評価は、まず中項目について、各々の評価基準に従ってレベル1（基礎点0点）からレベル4（同10点）までの四段階で評価する。次いで、基礎点に「重み係数」をかけて各大項目評価点を算出し、最後に大項目評価点に「重み係数」を

かけて総合評価点（100点満点）を算出する。

評価結果は、総合評価点によって、A（80点以上）からD（30点未満）まで四つのグレードで表記され、点数が低いほど改修の必要性が高いと判断できる。

対象建物の性能水準は、図1のレーダーチャートと図2の棒グラフによって表現される。

なお、検討の過程において、四つの国立大学及び高専機構の協力を得て経過年数の異なる建物を使った試行を行い、使い勝手を確認するとともに、一部の評価項目や評価基準を修正した。

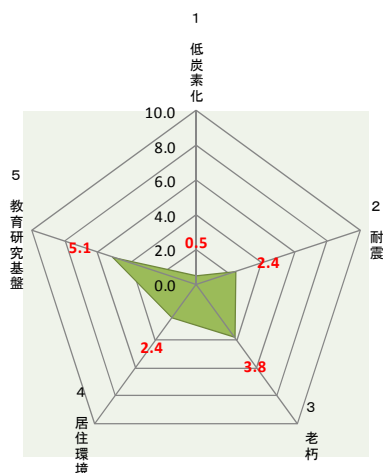


図1 大項目評価点を示すレーダーチャート

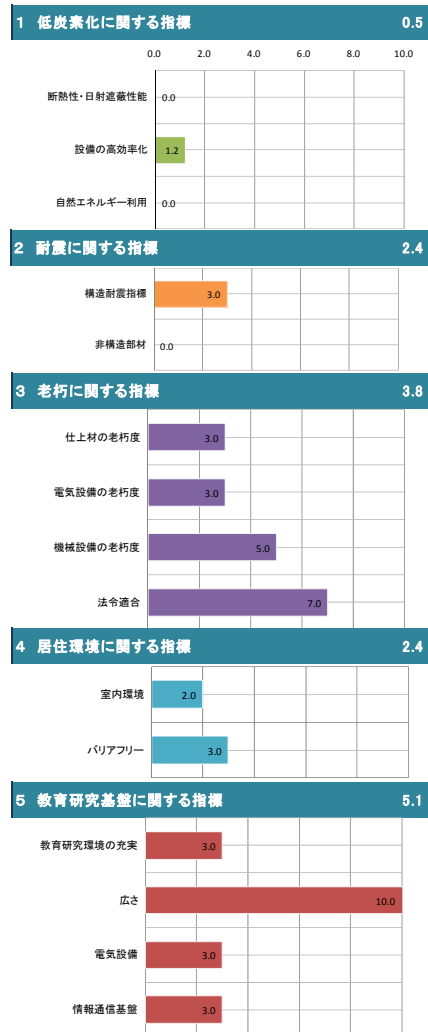


図2 中項目評価点

本研究の報告書等

大学施設の性能評価システム（平成22年3月）

<http://www.nier.go.jp/shisetsu/pdf/hyokasystem.pdf>